

今週のメニュー

■ [トピックス](#)

◇かわさき FM 79.1MHz 「庄司佳子のエコでハピネス」で塩ビを紹介

■ [随想](#)

◇古代ヤマトの遠景（87）－【歴代天皇と伊勢神宮（5）】－

木下 清隆

■ [編集後記](#)■ [トピックス](#)

◇かわさき FM 79.1MHz 「庄司佳子のエコでハピネス」で塩ビを紹介

かわさき FM 79.1MHz で「庄司佳子のエコでハピネス」という番組をお持ちのパーソナリティの庄司さんから番組に出演し塩ビについて紹介して欲しいと連絡があり、広報担当として番組収録に行ってきました。その経緯は、今年2月にプラスチック循環利用協会の神谷部長が同番組に出演し、同協会の事業内容やプラスチックのリサイクルについてお話をされ、その折、神谷部長がこちらを紹介されたことから今回の番組出演になりました。元々、神谷部長も川崎市の環境イベントに参加されている時に庄司さんとお知り合いになられ、番組に出演されたとのことでした。

かわさき FM 79.1MHz は、コミュニティ FM 放送局として、平成8年7月1日に開局した民間放送局で、川崎市の呼びかけで市と民間法人が共同で作ったかわさき市民放送株式会社（川崎市が55%を出資）が運営しています。スタジオは、川崎市の武蔵小杉駅前にある武蔵小杉タワープレイスの1階にあります。設立の大きな目的の一つは、川崎市内とその周辺に限った災害時に緊急放送を行うことと、その後の安否情報、ライフラインなどの生活情報を届けることです。そのため電波は川崎市全域をほぼカバーする程度となっています。災害のない普段は、市民の暮らしに役立つ生活情報をはじめ、川崎の市政情報、歴史、文化、イベント、スポーツなど、身近で耳よりな情報と音楽を24時間放送しています。



かわさき FM 放送局

冒頭で紹介しました庄司さんの番組は、毎週金曜日の午後2時から30分間放送されます。緑・川、エネルギー、ごみや地球温暖化など、いろいろなジャンルのゲストから話を聞いたり、テーマを決めて話をしています。

本番の収録は実質20分程度と短くて多くは話せませんでした。当協会の事業内容や、塩ビの特性、環境性能、製品、リサイクル、デザインアワード、出前授業について会話形式で話し、特に、環境については、いまだに一部誤解されているダイオキシンと環境ホルモン問題についていわれのない疑惑をかけられたが科学的にその疑いは晴らされているとお答えしました。

製品は、建材用途の他、血液バッグにも使用され、献血や輸血で長い間安全に使用されていることを説明しました。これについては、庄司さんもお存じでなく驚いておられました。また、[デザインアワード](#)では、第一回目の準大賞作品の「[さくら](#)」を紹介しながら、塩ビ業界のサプライチェーン全体を巻き込み、デザイン応募と製品応募があるユニークなアワードであることや、今年の募集について紹介しました。



塩ビ建材（樹脂窓）



血液バッグ

番組は、7月4日の午後2時から放送されます。塩ビについての正しい理解の普及のために、このようなメディアを通じての取り組みも効果があるのではないかと思います。

川崎FMの放送は、インターネットで全国の方にお聴きいただけます。

<http://csra.fm/blog/author/kawasakifm/>

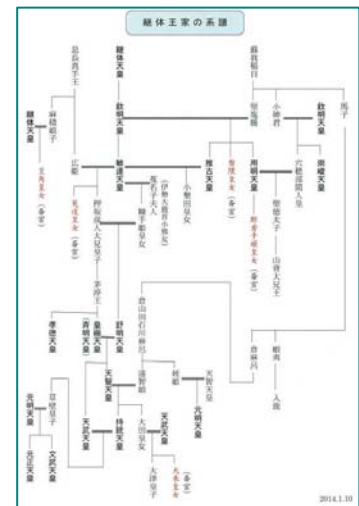
■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（87）－【歴代天皇と伊勢神宮（5）】－

木下 清隆

7) 天武天皇

蘇我氏の歴史改竄に正面切って、異を唱えたのは天武天皇である。なぜこの天皇が伊勢神宮に祀られている日神即ち、初代倭王に尊崇の念を抱いていたのかは分からない。この当時の国家の枢要な地位にあるものにとって、初代倭王＝伊勢大神＝饒速日尊＝日神は、常識だったのかもしれない。従って、壬申の乱の準備段階で、大海人皇子が吉野から美濃へ急ぐ途次、迹太川（四日市）の辺から伊勢神宮を望拝したのは、自然な行為だったのかもしれない。遥かな伊勢大神に向かって、「自分がこの戦に勝利した暁には、久しく途絶えております大神の祭祀を誓って行ないます。どうか大神のご加護を賜わらんことを希い奉ります」といった願掛けの言葉が自然に口をついて出てきたのではなかろうか。



[継体王家の系譜: クリックで拡大](#)

天武天皇は壬申の乱に勝った。これほどの大きな戦いに勝って皇位を奪い取ったものは他に居ない。応神天皇が誕生したときの戦いも大規模なものであったが、この時の応神天皇は担ぎ出された立場にあり、天武天皇のように自らが第一線に立って戦う立場とは異なっていた。それだけに、乾坤一擲の戦いに勝った天武天皇の手にした権力が、巨大なものとなったのは当然といえる。では、何故このような大規模な戦いが始まったのかということであるが、日本書紀に由れば以下のように説明されている。

その重要なきっかけとなったのは、天智天皇の死である。病の床にあった天智は、弟の大海人皇子を枕元に呼び、後事を託そうとする。形の上では、天智天皇が即位したときに

大海人皇子を皇太子に立てていたからである。しかし、大海人皇子はそれを受けず、天皇のために出家して仏道修行に励みたいと願い出る。それが許されると吉野へ向かうが、これは大海人皇子の深謀遠慮だったようである。天皇に会う前に天智の側近から「言葉に注意するように」との忠告を受けていたと記されているが、天智が息子の大友皇子を後継者とすべく、布陣を固めつつあることを良く知っていた大海人皇子は、自らの知恵で難を逃れたというのが正解であろう。近江朝の人々が大海人皇子を見送ったが、或る人が「虎に翼を付けて野に放つようなものだ」と云ったという。それから一ヶ月余りで、天智天皇は崩御する。

大海人皇子、即ち後の天武天皇が向かったという吉野とは、一体何処なのかは、長い間謎であったが、多くの発掘調査の結果、現在では「宮滝遺跡」がかつての「吉野宮」の遺跡であることが、確実とされるようになってきている。ここは吉野川の上流域であり、桜で有名な吉野より更に吉野川を5kmほど遡った右岸（北側）にある。辺りに平地は殆ど無く周りは山に囲まれ、眼前には吉野川の激流が岩を噛んでいる。現在でこそ小さな村落を成しているが、当時は殆ど何も無かったと想定される。こんな人里離れた辺鄙な場所に大海人皇子は、正妃の鸕野皇女（後の持統天皇）、草壁皇子、忍壁皇子及び僅かな郎党と隠棲していたのである。



宮滝遺跡



宮滝遺跡前の吉野川

しかし、ここでの生活も一年と続かなかった。或る人物が「近江朝では天智天皇の御陵を造営すると称して人夫を集めているが、彼らに武器を持たせている」と伝えたからである。遂に来るべきものが来た、と判断した大海人皇子の行動は素早かった。翌日には三人の使者を美濃へ旅立たせ、美濃に兵を集めること、不破道（現、関ヶ原）を塞ぐことを指示する。二日後、大海人皇子は、一族郎党約三十名を引き連れて、吉野を出立する。鸕野皇女は輿に乗るが、馬が調わず大海人皇子も初めは徒歩での逃避行となった。そのルートは、吉野→宇陀→室生村→名張→伊賀→柘植→鈴鹿→桑名→美濃と記されており、全行程は約170kmにも及ぶ。この間を四日間で踏破するのである。一日平均約40km、尋常の早さでは無い。夜、睡眠などまともにも取る間もなく、殆ど不眠不休の行軍である。しかし、行軍の途中から多くの人々が合流し始め、美濃には既に多くの兵士達が集められていた。大海人皇子側の態勢はそれなりに整っていたのである。実は、大海人皇子は事を起こすべく、既に準備していたとの説もあるが、本当のところは解らない。

これから本格的な戦闘が始まることになるが、その戦場は、琵琶湖を挟んだその東西と大和の三ヶ所である。ところが、書紀には大和での戦いの記述が大半を占めており、全貌は必ずしも明確ではない。しかし、近江側の大將である大友皇子の首級を挙げたことで、この大乱は一ヶ月余で決着が付いた。

天武天皇は伊勢大神に誓ったように、即位二年にして、大来皇女を齋宮に定め、一年半もの間泊瀬の齋宮^{はつせいつきのみや}で潔齋させた。この皇女が伊勢へ向かったのは天武三年の十月のことである。このような徹底した伊勢大神への心遣いは、齋宮の身を清めるというより、天武天皇自身の赤心の表明だったといえよう。“私の深く大きな感謝の気持ちと、真心をお受け取り下さい”との天武天皇の願いが、齋内親王の一年半に及ぶ潔齋の意味だったのではなからうか。

齋宮制度といわれるものはこのとき誕生した。更に天武天皇は齋宮派遣を再開するに当り、壮大な大義名分を構築した。それが「天照大神」である。天照国照彦火明櫛玉饒速日尊と伊勢大神とから、この名が生まれたとみられる。初めの「天照」と伊勢大神の「大神」とを結び付けたとの想定である。この天照大神は古事記原典の中で、高御産巢日神に替わる神に仕立て上げられた。現在の古事記の中では、徐々にその交替が進むような記述となっている。こうして伊勢神宮に坐す神は高天原の最高神、「天照大神」として復活した。天武天皇はこのような筋書きを自ら発想し、細部の辻褃合わせを信用の置ける者に任せたと考えられる。ここに現在の古事記の「原本」が完成した。これで蘇我氏の野望を打ち砕いたと、天武天皇は喜んだに違いない。

ところが、初代倭王＝出雲、の関係は復活されなかった。蘇我氏が創作した「出雲の国譲り譚」がそのまま残されたからである。その理由は、神武天皇以下の多くの物語と膨大な氏族系譜を、今更ご破算には出来なかったからであろう。蘇我氏が作り上げた系譜によって社会秩序が保たれている以上、無用の混乱を起こしたくはなかったということであろう。そこで天武天皇は、高天原の主導権争いの方に視点を移した。そこが皇統の淵源であり、力の源泉だからである。初代倭王が地上の皇祖の地位を神武天皇に奪われたことから、天武天皇はその争点を天上に引き上げた。そこで日神の名を天照大神に改め、皇祖の地位を再度与えたのである。

ところがこのような行為によって、この天照大神と天武天皇との間には全く新しい関係が生み出された。天上の天照大神と現世の天武は一体であるとの意識が生まれてきたのである。自ら天照大神を天上の最高神に仕立て上げ、この神と一体化することによって、自らも地上の神となる仕組みが出来上がったのである。これは憑依権力の一形態といえるが、自らが神となる思想はかつて無かったことである。ここに現人神は誕生した。天武天皇はついに現人神となったのである。このことは、柿本人麻呂の次の歌で良く知られている。



いかづちのおか
雷丘（奈良県高市郡明日香村）

「大君は神にしませば 天雲の雷の上に いほりせるかも」
（大君は神でいらっしゃるので、天雲の雷の上に、お住まいしておられるに違いない）

このような新しい関係が生まれてくると、伊勢神宮は単に祖神として、或いは鎮護国家を願って祭祀する対象ではなく、天皇個人の力の源泉となってくる。従って、ここの祭祀も国家祭祀というより天皇個人の祭祀の意味合いが強くなる。要するに伊勢神宮の天皇による私物化が始まるのである。

このような変化の一例が、天武朝になって始まった「私幣禁断の制」であろう。皇后・皇太子の場合は勅許を得て奉幣できるが、これ以外は皇族でも全く認められず、禁を犯せば流罪に準ずる重罪として取り扱われた、とされる制である。このような徹底ぶりもここで説明したような考え方から容易に理解することができよう。伊勢神宮は祭神が天照大神に替わったことで、その機能を大きく変えたといえるが、この後、持統朝になって、どんどん返しが起こる。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

日本のマチュピチュと言われる天空のお城竹田城の人気を聞き、竹田城ではありませんが山の上から見た雲海を思い出しました。

竹田城は標高 353 メートルの位置にあり、石垣しか残っておらず天守など建物は現存していません。私が雲海を見たお城は、現存する天守を持つ山城としては日本一高い、標高 430 メートルのところであり、白い漆喰塗りの壁と黒い腰板の美しい天守を見ることが出来ます。駐車場から歩いて 30 分ぐらいの急な山登り、中間ぐらいの地点で引き返したいという同行者を説得し頂上へ。小さいですがお城がありました。ふと後ろを振り向くと雲海が広がっていました。二人で「あー」と感動の声。登る山道の険しかったことと綺麗な雲海が目焼き付いていい思い出になりました。また行ってみたいところの 1 つです。

(リマル)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp